

そだ
「粗朶」がむすぶ豊かな里山とやさしい河川

防災の

森づくり

川づくり

事業報告書

2010年6月～2011年2月

主催：特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

後援：国土交通省中部地方整備局、愛知県、岐阜県

2010年度 セブンイレブンみどりの基金助成事業



山が泣いているといわれます



川が病んでいるといわれます

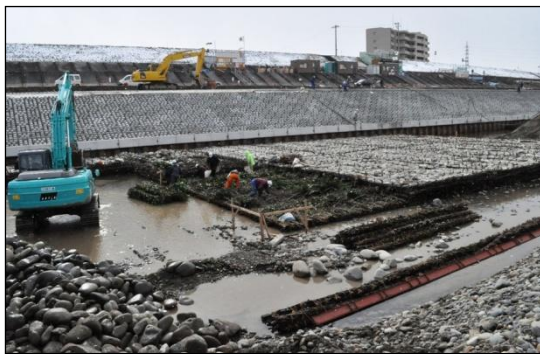


…そんな問いかけから 始まりました

昨今増加している「ゲリラ豪雨」による水害の原因が、山の荒廃や環境破壊にあると言われていています。災害救援・防災の啓発活動などに取り組むわれわれNPO法人レスキューストックヤードは2010年度、この問題に正面から向き合う事業を行いました。災害ボランティアの方々と岐阜県の里山に入り、かつて農閑期の農家が当たり前のように行ってきた山の手入れである「粗朶(そだ)」づくりを体験。それらを活用して河川の護岸整備にあてる「粗朶沈床工(そだちんしょうこう)」などの伝統的な川づくりについて学び、一部を名古屋の都市河川に再現しました。「山と川のつながり」「環境と防災の関係」を考えながら行った1年間の事業の成果を報告いたします。

【粗朶(そだ)とは】 里山の雑木を束ねたもの。日本では昔から薪(まき)などの燃料として使われてきましたが、明治期にオランダ人土木技師デレーケが粗朶を複雑に組み合わせることで川の護岸の基礎に生かす「粗朶沈床(そだちんしょう)工」を日本に導入。昭和 40 年代ごろまでは各地の里山で農家が農閑期の作業として「粗朶づくり」に励み、木材業者などがそれを用いて河川工事を行っていました。ここでは里山の保全が川の整備、つまり水害に対する防災・減災につながっていたのです。しかし高度経済成長にともなって河川整備はコンクリート工法が主流となり、里山では農家が減って森林の手入れができなくなりました。岐阜県では全国でも数少ない粗朶の生産とそれを活用した河川整備がいまだに行われていますが、その継承も危うくなっています。

岐阜市の長良川河川敷での粗朶沈床工の施工風景 (2010 年 2 月撮影)



【事業実施スケジュールと場所】



第1回シンポジウム

6/27(日) 名古屋・栄

皮切りのシンポジウム兼勉強会として、われわれが今回の事業のモデルとした「水害被災地での炭焼きの再興」に取り組む神戸のNPO「被災地 NGO 協働センター」代表の村井雅清さんらを招いて、昨今の災害と森林や河川整備の関係について討論していただいた。



報告1・村井雅清さん（被災地 NGO 協働センター代表）

- ・ 2009年8月の兵庫県・佐用町水害は山林が崩壊、流木が川をせき止めた。
- ・ 爪跡が残っても放置される山林。森林組合は「きちんと手を入れている」と言う。
- ・ 家を失い、「いっそ死んだらよかった」と落ち込む人たちがいる。
- ・ 被災者に寄り添う活動として「足湯ボランティア」「炭プロジェクト」が始まった。
- ・ 全国から集まった炭計15トンを被災家屋の床下に。吸湿、脱臭効果がある。
- ・ 地元の竹炭組合の指導で炭焼きにも挑戦。
- ・ 姫路市など周辺からヤナギの木の提供始まる。
- ・ 15年間使っていなかった炭焼き窯に火が入る。
- ・ 大阪の学生が炭の商品化に乗り出す。簡単には売れない…でも考えられないような現象。
- ・ 「総合治水」の時代。豪雨対策で潮止め堰を撤去したらアユが遡上した例もある。

報告2・木村正信さん（岐阜大学応用生物科学部・砂防緑化学）

- ・ 森林に降る雨は大半が樹木にたまり、蒸発する。その他は地下に浸透、地表流出。
- ・ 森林伐採で蒸発量が少なくなり、河川への流出が増加する。
- ・ 「スポンジ」のような土壌が水をためこむ。
- ・ 表土の形成には長い時間が必要。もとの戻すには多大な労力がある。
- ・ 木の根が張ることによって地盤が強化され、地表面の浸食防止になる。
- ・ ただし、これらがただちに洪水防止や土砂崩れの防止には結びつかない。

・森林の「スポンジ」の能力を超える大雨や「根こそぎ」崩壊する土砂崩れのメカニズムなどの不確定要素が大きい。

報告3・井納英昭さん（株式会社井納木材社長）

- ・粗朶とは…「おじいさんが山へ柴刈り」に…の柴。
- ・サクラ、ナラ、カエデなどの雑木を束ねたもの。
- ・万葉集に詠まれた「しがらみ」。
- ・河川伝統工法はお坊さんや戦国武将が始めた治水対策。
- ・明治期にオランダ人技師デレーケが「ケレップ水制」「粗朶沈床工」を伝える。
- ・護岸工事の基礎として粗朶を活用。
- ・コンクリートにとってかわるが、近年になって見直されている。
- ・循環型林業、山と川のつながりがダイレクトにわかる。
- ・川は一つの大きな生き物。「病は木から」。
- ・日本人の思いやりの心を表す。

シンポジウム（コーディネーター＝RSY 代表理事・栗田）

- ・森づくりはあるていど人間の手が入らないといけない。しかし過疎の問題などあって簡単ではない（木村）
- ・粗朶扱う業者は昭和 30-40 年代には岐阜県内だけでも十数社。現在は全国でも 3 社。ピーク時年間 3 万束が現在は 10 分の 1。使い先の確保、作り手の後継者難が課題（井納）
- ・粗朶の活用は CO2 削減、里山の手入れに貢献。「里山生態系」保全の一環として災害防止、減災に結びつく（木村）
- ・人間と里山、自然とのかかわり、もっと全体的な視野で見えていかないと。東海豪雨でも下流の人が上流の問題をわかっていなかった（栗田）
- ・減災サイクル、災害マネジメントサイクルの事前の備えのなかに「開発」が挙げられている。災害を引き起こす開発を問うという、もう一つのベクトルをつくらないと、本当の意味での減災にならない。中越や能登の地震で家屋倒壊が少なかったのは、しなやかな木を使って頑丈な家をつくっていたから。昔の知恵が守られていく「もう一つの社会」「深呼吸のできる社会」をつくらなくては（村井）
- ・温暖化の影響は現れ始めているが、異常気象イコール災害ではない。乱開発や人間の行為が原因となっている点で、災害は明らかに社会現象。開発時に防災の視点を取り入れなければ。防災は空間処理。土砂や水などをせきとめるのではなく、あらかじめ用意しておく。そこにボランティア活動がかかわれば防災に適した地域づくりができる（木村）

粗朶づくりの里山見学

7/10(土) 岐阜県揖斐川町

まずは山の現状について知ろうと、粗朶づくりの行われている里山見学を企画。中型の貸し切りバスに親子連れら約20人が乗り込み、名古屋から岐阜県揖斐川（いびがわ）町へ。実際に粗朶生産が行われている「有鳥（あっとり）」地区の里山に入った。



里山の植生に詳しい岐阜県立森林文化アカデミーの柳沢直准教授に案内をお願いし、スギとヒノキの違いから、粗朶に使われる広葉樹の種類や育ち方までを解説していただいた。柳沢さんは広葉樹の成長の早さを強調し、「昔の人はこの木の成長をうまく利用していました。若い木は粗朶に、さらに育つとシイタケのほだ木などに使いますが、それ以上大きくなると利用できなくなり、やがて山が荒れていきます。適度に人の手を入れていかなければいけないのですが、後継者がいなくなって難しくなっています」などと訴えた。参加者は「森が防災などいろんなことにつながっているとわかった」などと感想を語った。

不定期学習会「近自然河川工法と防災」

8/6(金)名建協

当法人主催の不定期学習会に合わせて「近自然河川工法と防災」を開催。元愛知県治水監で近自然工法研究会会長の本守真人さん、同会の事務局を務める名古屋建設業協会会長の山田厚志さんを招いて、粗朶などの自然素材を用いた河川整備の歴史や現状について学んだ。40人以上の参加者が熱心に聴講した。

山田さんは、柳田國男が詠んだといわれる「美しい村などというのは／はじめからありようがなく／そこに住んでいる人たちが／美しく住もうと思って／はじめてできるのである」という詩を防災に置き換えて紹介することから始め、水害は自然災害なのだろうか、そもそも川は制御できるものなのだろうか、という「逆転の発想」を促した。そして、美しく愛着のある河川環境をつくるのが水害への備えとなっているスイスやドイツの例を引き、「近自然とは単に自然に帰れということではなく、

自然の力を賢く利用して、個の自由に先立つ『群れの安全』をつくる文化の問題」だと強調した。

一方の本守さんは、日本に古くから伝わる河川伝統

工法を数多く紹介。戦国時代の巧みで大規模な治水事業の跡が今に残る「信玄堤」や「粗朶」の活用例などを挙げ、「これらはもともと地域住民が持っていた技術だが、今は施工する人がいなくなりました。すべてを伝統工法に戻すことはできないが、発想を現代に生かしてほしい」と結んだ。



生物多様性交流フェア出展

10/16～17 名古屋国際会議場周辺

10月には名古屋で生物多様性条約締約国会議（COP10）が開かれ、世界190カ国から1万人近くの政府関係者や研究者が集結した。これに合わせ、愛知県や名古屋市が会議場周辺で開いた「生物多様性交流フェア」に当法人も地元NGOの一つとして出展。本事業についての展示やアンケートを実施した。

アンケートは名古屋のほか岐阜、三重、兵庫、山口、長崎などからの来場者36人から回答を得た。「最も強く印象に残っている災害」として7割が「阪神・淡路大震災」を、2割が「東海豪雨」を挙げた。「環境と災害の関係を意識したことがあるか」という問いはほぼ全員の34人が「はい」と答えた。「現代の災害を大きくしている要因」（選択制、複数回答）としては16人が「地球温暖化」、9人が「都市化」、11人が「生物多様性の喪失」と回答。その他の要因として「災害に対する知識不足」「森林管理」などの記入があった。アンケートを通して、環境問題に意識の高い人たちに、災害との関係についても考えてもらえる機会となった。



粗朶づくりの基本講習

11/13(土) 岐阜県関市など

11月にはいよいよ実際に里山に入っ
て「粗朶づくり」を行った。COP10の展
示を通じて関心をもってもらえた愛知
県内の学生4人を含め、幅広い年代の
17人が参加。名古屋からワゴン車2
台に分乗し、まず岐阜県美濃市の森
林文化アカデミーに到着。間伐材約8
万本を使って建てられたユニークな施
設の一室で、7月に引き続いて柳沢直
准教授から里山の木の利用の歴史や意
義について簡単な講義をしていただき
、粗朶を河川の基礎工事に生かす「粗
朶沈床工(そだちんしょうこう)」を取
り上げたテレビ番組のビデオを鑑賞し
た。



昼食後、車で約20分ほど離れた同
県関市の里山へ。ここで粗朶づくりを
している佐藤治市さん(74)、弟の孝
さん(70)、林甚一さん(74)の3人
の農家と合流。実際に広葉樹を切り
、ひもでしばって粗朶にする作業を
見学した。参加者も無理のない範囲
で手伝ったが、2メートル以上の粗
朶の束は思ったより重く、扱いは大
変だった。

3人は「山に入って体を動かすのが
一番」と、かくしゃくとしていたが、
近年は需要がめっきり減って採算が
合わないのに、手を入れなければ森
が維持できないため、ボランティア
的にやっているのが現実だとこぼし
た。



周囲は広葉樹の雑木林と、スギやヒ
ノキの人工林が混交した森。特に人
工林は細い木が密集し、倒木が多
く「荒れた森」という印象のところ
も見られた。林さんは「人工林は
根が張らず、すぐ崩れる。こんな
山にまで入る人間はもうおらん
ので、荒れてもそのままになってし
まう」と嘆いていた。

参加者からは「貴重な作業を見る
ことができた」「川での活用の現
場を見たい」などの感想が聞かれ、
柳沢准教授からは「川の環境や漁
業の問題から山の手入れに取り組
む活動はあるが、今回のように治
水面から粗朶を見直すことは、防
災を考えるきっかけとしてもびつ
たりくる」と、この事業を評価し
ていただいた。



連柴づくりの講習

12/5(日) 岐阜県本巣市など

河川工事の現場では粗朶をいくつか連結して5メートルや10メートルなどの規格の長さにする。この「連柴(れんさい)」づくりを、全国でも数少なくなった専門業者の職人から指導してもらった。

前回と同じ関市の里山に入り、初めての参加者に実際の粗朶を見てもらった後、約1時間かけて西の本巣市に移動。ここに60年以上前から本社を構える井納木材(株)を訪れ、粗朶を河川の整備工事に使う過程の作業を見学した。



一堂が驚いたのは、本社から少し離れた敷地内にあった粗朶の山。平屋の家が一軒ぎっしり埋まってしまうだろうという量の粗朶の山が3つ並んでいた。全体で約1万束だという。それでも「今年は需要が少なく、例年なら3万束ほどがストックされています」と同社の井納英昭社長。これだけの仕事地域で毎年維持されてきたという歴史とスケール感に圧倒された。

連柴づくりの作業はまず専用の木枠の台に粗朶を置き、「締め金」と呼ばれる輪っか状の金具で締め付けながら、30センチおきに針金で縛っていく。2人がかりの作業だが、かなり力があるようで、井納さんも「最後までやると息が上がります」と話していた。



続いて針金の中に縄を縛っていく。こうして15センチおきに針金と縄が交互に現れる。このような規格は各地の行政によって定められ、災害の復旧工事に粗朶を使う場合にも、要綱などで明記されているのだという。

今回は、その縄の縛り方をビニルパイプの“練習台”を使って体験させてもらった。参加者は同社の社員である職人の手元を見な

がら同じように挑戦したが、縄を前に回したり後ろに引っ張ったりと複雑でなかなかうまくできない。一つ一つの動きをぐいぐいと力強く、素早くこなす職人の技に感心しきりだった。

河川伝統工法の実験設置

1/31～ 名古屋・矢田川など

年をまたぎ、事業はようやく「山」を下りてきて「川」にたどり着いた。岐阜県の里山から、間伐材と粗朶を組み合わせた「河川伝統工法」の部材を持ち込み、名古屋の典型的な都市河川である矢田川に実験的に設置することになった。

作業を公開した1月31日は朝から小雪の舞う厳しい寒さだったが、里山に入ってもらった一般参加者はもちろん、初めてこの事業に関心をもってくくださったボランティアや関係者の方々15人ほどに集まっていた。

井納木材(株)の井納英昭社長の監督のもと、トラックから長さ約2メートル四方、高さ50センチほどの「お魚のゆりかご」と呼ばれるユニットが3基、クレーンで吊り上げられ、川底に沈められた。この「ゆりかご」は、間伐材の木枠の内側に粗朶や竹を詰め込み、上に玉石を載せて

固定するもの。

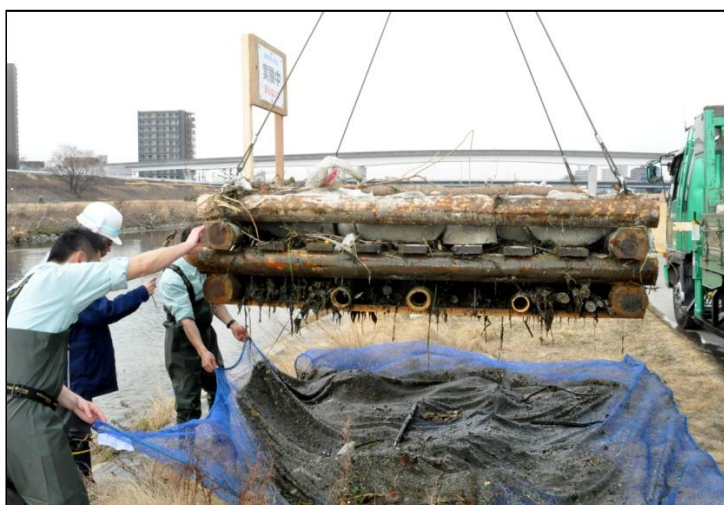


伝統工法は粗朶などの柔軟な素材を敷き詰めることで川底の浸食を防いだり、間伐材の木枠を川に入れることで水の勢いをコントロールしたりすると同時に、環境面でもよいとされる。素材となる木を調達することが山の手入れとなり、その木

を使って川を整備することにもなる。まさに山と川の関係が目に見えてわかる瞬間だった。

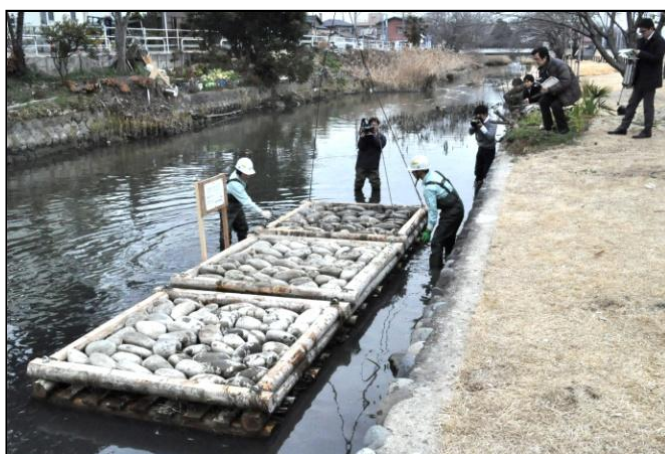
「ゆりかご」を設置したとたん、川にせせらぎのような美しい流れが生まれた。井納さんによると、コンクリートで固められた川は流れが単調で速すぎ、魚にとって決してすみよくはない。こうして流れに緩急や変化をつけることで、魚が寄りつき、卵をうみ育てられるという。

当初は3日ほどで撤去する予定だったが、その後の調整の結果、設置期間が1週間ほどに延長。さらに国交省管理の矢田川の下流から愛知県管理の上流部に移し、魚類調査を含めて効果をはかることになった。



矢田川での移設作業の前には井納木材の社員らと周辺の清掃作業を実施。川の真ん中に見えていた大きなゴミをクレーンで引き上げると、ミニバイクやサッカーゴールが現れた。この矢田川は2000年の東海豪雨時には堤防すれすれまで増水した川で、あらためて日ごろの環境保全と防災の関係を考えさせられた。

この1週間後に「ゆりかご」を引き揚げてみると、粗朶の間に20匹ほどの魚がみついていた。中には大きなウナギまで。冬場なのでほとんど魚はいないとも思われたが、予想以上の“大漁”に歓声が上がった。ウナギはかなり活きがよく、ツルツルとつかまえるのが大変だった。



その後、「ゆりかご」は名古屋の中心部を流れる「堀川」へ。名古屋城築城のために造られた堀川は完全な人工河川。戦後は工場や家庭からの排水が流れ込みドブ川となっていたが、最近ではさまざまな浄化活動が試みられている。その一つにこの「ゆりかご」も活用したいと市が寄付を受け入れ、恒久的に設置されることになった。

当日は新聞、テレビ計3社の取材も入り、翌日の紙面を飾った。

事業報告会

2/27(日) 名建協

事業の締めくくりの報告会を、当法人が事務所を置く名建協会議室を借りて開催した。ゲストとして2010年の水害で被災者支援に当たった山口県山陽小野田市社会福祉協議会の金光康資事務局長に、山の荒廃と川の氾濫の関係を現場を知る立場から語っていただいた。



金光さん講演要旨

- ・山歩きで思うこと。山が荒廃している、生態系も崩壊、地域文化も崩壊、人間の心も荒廃、地球環境も悪化、災害発生により国土も荒廃している。
- ・山野草が根こそぎ持ち帰られてしまう。キレンゲショウバ、サギソウ、ヤマシャクゲ…みな激減。
- ・自然の生態系はヤジロベエのように非常にデリケート。いったん人の手が加わると一気にバランスが崩れる。
- ・昔の五右衛門風呂は薪をくべるときに誰かが声かけ、人を思いやっていた。快適、便利になって人を思いやる気持ち、感謝の気持ち、親子の交流のチャンスが失われている。
- ・人の休養には樹木が必要。森の「forest」は「for rest (休養のために)」。
- ・2010年の水害は防府市、美祿市では土砂災害、山陽小野田市では洪水災害だった。70年近く生活してきたがこんな水害は初めてだった。
- ・今回の洪水で流域は一体であることを実感した。洪水被害の厚狭地区は降雨の観測がなかった。上流の雨が一気に川に流れ込んだ。
- ・洪水災害に気を取られると土砂災害のこと忘れる…慌てて山の家を一軒一軒回った。起こるところが違って頭の中に入れておかないと。
- ・上流の森林はスギ、ヒノキの人工林が多い。谷が狭くなったところの山で大規模伐採があった。
- ・人工林では陽が当たらないため樹木の質がもろい。雨が一気に斜面を駆け下り川に流れ込む。ツエ（崩）、山津波、鉄砲水、「竜のたうちまわって山を駆け下りる」などと言われる。
- ・真砂土（風化花崗岩）が最も崩れやすい。伐採地、林道、住宅開発地など人の手が加わったところが崩れやすい。
- ・砂防堰堤はあってもグラウンド化しているものも。川が痩せ、生態系の寸断につながるという説もある。
- ・植林をする場合に尾根筋、沢筋、急傾斜地は避けるのが昔の人の知恵。
- ・山や森、木に対して敬虔な気持ちがなくなった。

- ・豊かな森つくれば災害が起こらないわけではないが、山の崩壊を少しでも食い止める役目、手がかりになる。
- ・災害復旧から災害予防へシフト。医療と同じく、病気にならないための予防が大事。



金光さんの講演後、参加者でグループをつくりワークショップを行った。災害を防ぐ「山の保全、川の整備」のために自分たちでできることを書き出して、発表してもらった。

参加者からは「山や川を歩いて、現状を見る」「国産材の利用を促す」「水泳の授業を川でする」などの意見が出された。

(本報告会は「リコー社会貢献クラブ・FreeWill」のご寄付を受けて実施しました)

まとめ

本事業は、近年急増している「ゲリラ豪雨」などによる水害に見舞われた地域で「川の問題はさかのぼれば山の荒廃にある」という声がわれわれにとって聞き逃せなくなり、里山保全などの環境問題を防災面から本格的に取り組みようと始めた企画である。

この意味で、本事業は取り組み自体が他分野や他団体との広がり、協力を模索するものであったと言える。初回のシンポジウムに招いた神戸市のNPO「被災地 NGO 協働センター」は阪神大震災の被災者支援から始まった組織であるが、2009年に死者・行方不明者20人という大災害を経験した兵庫県佐用町ではかつての地場産業であった竹炭づくりを復活させ、再び山に手を入れることが地域の復興となり、災害の再発を防ぐことにもなるとして、多くの環境団体や若者たちと協働している。

実際、シンポジウムには、これまでわれわれの防災活動には参加したことがなかった環境や農林業に関心のある人たちが参加してくれた。しかし、全体の参加者数は20人程度と、見込みを大きく下回ってしまった。

その後もできるだけ幅広く声を掛けるよう努力したが、「粗朶」という言葉になじみがなく取り組み自体がわかりにくいのか、思うような反応を得られなかった。しかし、地元の名古屋で10月に開かれた生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)は里山がテーマの一つであり、粗朶もキーワードの一つとして語られることがあった。COP10関連イベントへの出展には、本事業申請時には想定していなかった多額のブース料がかかることがわかり、当初は出展を見合わせる

つもりだった。ところが、われわれの取り組みを知った「名古屋 NGO センター」から共同出展の打診があり、2 日間だけであったが会場の一角で本事業をアピールすることができた。同センターは国際協力や開発系の NGO、NPO とのつながりが強い団体だが、本事業を地元での地に足のついた取り組みとして非常に高く評価してくれた。

11 月の粗朶づくり講習では、COP10 での展示で関心をもったという大学生が友人を誘って参加。「山に入ったことはほとんどない」という都会っ子たちが、70 歳を超えた生産者がチェーンソーをもってきびきびと動き、山の手入れをする姿に「貴重な作業」と心を動かされ、「川での活用もぜひ見てみたい」と感想を語った。

粗朶づくりはかつて、農家が農閑期に当たり前のようにしていた作業だったが、燃料の薪として使われることはなくなり、河川整備の材料もコンクリートにかわり、需要が激減。岐阜県でも年間 30 万束以上だったという生産量は十分一程度になってしまった。粗朶を河川整備に生かす業者は全国でも 3 社ほどしかなかったとされ、そのうちの一家が岐阜県本巣市の井納木材㈱。創業以来 60 年以上受け継いできた伝統工法が社会情勢や環境の変化にさらされている中で今回、われわれのような NPO とは初めての協働に挑んだ。前年度までは長良川での大規模な工事を担当していたが、本年度は公共工事全体の落ち込みもあって現場の確保が難しい見通しだったため、今回の助成事業で工事を実演してもらうことになった。NPO が発注するという“変則的な公共工事”は当初、手続き的に 3 日間ほどが限度とも見られたが、河川管理者である国交省中部地方整備局庄内川河川事務所の担当者が本事業を高く評価、愛知県や名古屋市との橋渡しも積極的に行ってくれ、国、県管理の河川で 18 日間の設置後、名古屋市に引き渡して半永久的に設置することになるという、望外の成果を得ることができた。

本事業が後半にさしかかるところから次年度以降の発展を見据えるようになり、2005 年の愛・地球博（愛知万博）の収益を活用した「あいちモリコロ基金」の 2011 年度助成申請に応募。3 月上旬に 500 万円の助成が決定した。その直後に、東日本大震災が発生。M9 の地震と津波、さらに原発事故も重なる未曾有の災害に、当法人も長期的な被災地支援の態勢に入った。このため「モリコロ基金」事業の開始は秋以降に延期することにした。

ただし、今回の震災は原発事故に象徴されるように、戦後の経済発展とともに築いてきた日本人のライフスタイルや価値観の根本的な見直しを迫っている。防災の観点から「河川伝統工法」に取り組む本事業は、こうした流れにも乗る重要な問題提起を含んでいるとあらためて確信した。震災の被災地にかかわり続けつつ、本事業を発展させる機会を常に見据えていきたい。

本事業の実施にご理解、ご協力いただいた関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

川に命を…堀川に「魚のゆりかご」

防災NPO、間伐材使って守山に

災害救援や防災に取り組むNPO法人「レスキューストックヤード」(名古屋市中区瀬古一丁目)は17日、同市守山区瀬古一丁目の堀川に、スギの間伐材などで作った「お魚のゆりかご」を3基、設置した。間伐材などの有効利用と生物環境の向上を訴える狙い。市に寄付する。

ゆりかごはスギの間伐材を組み合わせ、隙間に桜やナラの枝や竹で編んだ粗朶を入れ、重しに石を積んだもの。重さ1・4ト。

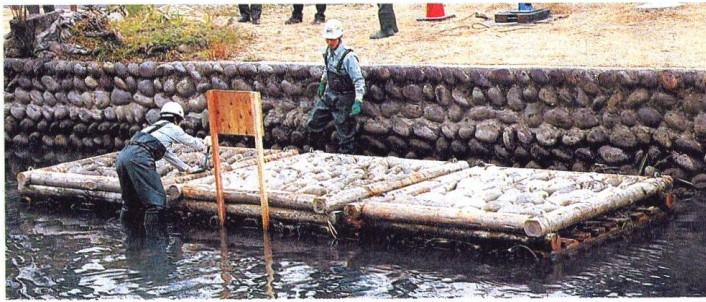
コンクリート工法が普及する昭和40年代以前は川岸や川底が急流で削られないよう、広く採用された工法で魚の産卵場所だった。

岐阜県本巣市の木材会社などの協力で設置した。費用は50万円。同法人スタッフの関口威人さんは「川が1気にはらんしないようにするには、上流の森林の手入れが大切。粗朶づくりは農家の収入源でもあった。防災と環境を結びつけて考えたい」と話した。1年がかりで里山見学などにも取り組んだうえで、27日午後1時半、同市東区京一丁目の名建協で報告会を開く。参加無料。

問い合わせはレスキューストックヤード(052・253・7550)へ。

同市によると、市管理の川では、

コンクリートの上に土をかぶせるなどの多自然型工法を採用しているが、こうした伝統工法の例はないという。(伊藤智章)



川に設置した伝統工法の「お魚のゆりかご」(名古屋市中区瀬古一丁目)

2011年2月18日付朝日新聞朝刊名古屋版

里山由来の「粗朶」設置

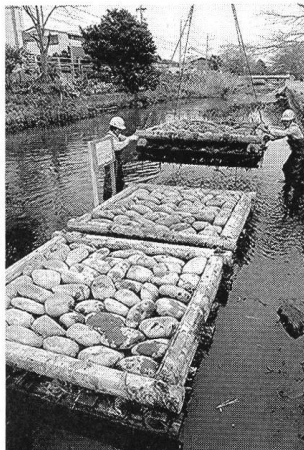
災害救援や防災に取り組むNPO法人「レスキューストックヤード」(名古屋市中区)が17日、同市守山区の堀川に、里山の間伐材を束ねた粗朶を設置した。近く市に寄贈する。

粗朶は木の枝や竹などを束ねて格子状に組み、石を載せた資材。川底に沈めることで、魚などのすみかになりやすく、川の流れの勢いもコントロールできる。この日は二丁四方の三基を設置した。

レスキューストックヤード

2011年2月18日付中日新聞朝刊愛知県内版

NPO法人 名古屋の堀川に



魚のすみか確保や流れの制御のため、クレールで設置される粗朶(名古屋市中区瀬古一丁目)

本巣市などの業者も協力している。設置した三基は事前に名古屋市内の矢田川に沈め、ドはかねて「防災の森づくりに川づくり」と題して粗朶の水流や生物への影響を調査。ウナギなどがすみかにいる。粗朶製作には岐阜県したことが確認された。



【主催・問い合わせ先】 特定非営利活動法人レスキューストックヤード

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

WEB: <http://rsy-nagoya.com/>

TEL: 052-253-7550

FAX: 052-253-7552

MAIL: info@rsy-nagoya.com